

私の研究



京都大学大学院
経済学研究科・経済学部 講師
岩島 史

私の研究関心は、農業・農村とジェンダーの視点から、日本の「戦後」を再検討することである。日本の「戦後」という時代は、平和、民主主義、経済成長という価値空間で示されてきたが、そのような「戦後」という意味体系は、冷戦体制と植民地、エスニシティの問題、そしてジェンダーの視点をとりこぼしているからこそ可能になったものであった。

これまでの研究では、現在の「女性活躍」ともつながる、戦後農村における女性のエンパワーメントの歴史を批判的に検討してきた。戦後の農村女性は、過酷な労働と封建的な制度に抑圧されていた状態から、民主化や高度経済成長を経て、現在では地域づくりや新しい農業の担い手として「活躍」するようになるというストーリーで描かれてきた。しかし農村女性の経験をこのような単線的な発展のストーリーで語ることは、社会の様々な非対称な構造と制約を不可視化しながら温存してきたのではないだろうか。2018年に提出した博士學位論文をベースに2020年に出版した単著では、このようなストーリーを「エンパワーメントの物語」と名付けた。社会開発の「成功例」として国際開発への流用がめざされることもある1950-60年代農村の生活改善に焦点をあて、政策が農村女性を定義する言説と、政策の実施のされ方、農村女性の手記分析やライフ・ヒストリー分析、

地域社会の農山漁業と経済、生活に関する規範などから、エンパワーメントの対象が「結果としての」(農村女性)なる集団が設定されていく過程を明らかにしてきた。

現在は、農業・農村の「家事」「育児」労働に関する研究に着手している。フェミニスト経済学では1960年代後半から、家事労働を「労働」と捉えて経済学的分析の俎上に載せる試みが続けられてきたが、近年、経済史の分野でも「生活」や再生産労働の分野が注目を集めている。私が現在取り組んでいるのは、経営(生産)と生活(消費)が未分離であると言われてきた農家生活における種々の労働や役割から、「家事」「育児」が私領域として分離され、それらが女性の役割として構築されていく過程を明らかにすることである。私的でドメスティックなことと考えられがちな「家事」「育児」や「生活」という分野だが、実際には、例えば家庭用電化製品などを通して、グローバルな冷戦の地政学や市場経済、科学主義や近代家族イデオロギーなども接続するポリティカルな領域でもある。例えば、日本の農村にまず普及した家電は白黒テレビであるが、その次に普及した電気洗濯機は、社会における理想的な女性像や「清潔」という概念の形成に重要な役割を果たしたとされている。また、洗濯機は、米国の技術導入によって開発が開始され、米国の由来の「広告」や「マーケティング」とい

う販売戦略が初めて本格的に使われ、普及したのももあった。この点からも冷戦下で民主主義や女性解放の象徴であるとした米国の冷戦戦略と無縁ではなかっただろう。他方で、都市の核家族世帯では、家電製品の導入は米国の消費生活と、家電を使いながら生活を1人で切り盛りする「主婦」へのあこがれによって普及したとされているのに対し、農村では、洗濯機のような省力家電の導入が、女性の過重労働を軽減するためだけでなく、それによって「明るい家庭」を作り、息子が農村にとどまり、そこにまた「嫁」がくること、つまり「家」の存続を可能にするものとして期待されていた。地域社会のジェンダー秩序や歴史的な脈絡も密接に絡まりあいながら、企業の販売戦略や、政策による生活改善と女性たちのグループ活動を通して、「家事労働」は可視化され概念化されてきたといえる。

今後は、農村における家電製品の販売にも重要な役割を果たしていた農業協同組合婦人部のグローバルな活動の解明や、現在参加している中国農村における生活秩序とジェンダーについての国際共同科研での研究を手がかりに、東アジア農村における「家事労働」「育児労働」の成立過程の国際比較や、その冷戦下での地政学的意味についても研究をすすめる、日本の農村生活を通して冷戦史・帝国史を再検討してみたいと考えている。

教員の紹介

Retired
退任

門脇 諒

京都大学大学院経済学研究科・経済学部講師
2023年3月31日 退職

New Face
新任

岩島 史

京都大学大学院経済学研究科・経済学部講師
2022年10月1日 着任
【担当科目】
学部：入門演習 特殊講義 女性キャリア論
大学院：ジェンダーと経済